



「“病気を抱えながら家で 過ごすこと”を支える訪問看護」

受賞者：葉山 香里さん

私が訪問看護ステーションを立ち上げてから2年目の年末、新規の訪問看護の依頼があった。Tさんは神経難病を患った50代の男性。気管切開と胃ろうを造設され、自分ではほとんど身体を動かすことができない状態。急な発症であったが、入院も長期となり病状も安定してきたため、奥様が退院を希望していた。

病院での退院前カンファレンスで担当ケアマネージャーが「自宅への退院は難しいのでは？」と言ったため、なぜそんなことを言うのだろうか？と思い、早速「私のステーションは年末年始も訪問しますし、何も問題ないですー」と提案し、退院の方向へ話が進んでいった。

それからは、訪問診療への依頼、介護ベッドの導入、吸引器の準備とスムーズに進み、無事に12月30日に退院となった。そして、お正月を迎える前には入浴は欠かせないということで、退院翌日に訪問入浴による入浴ができた。Tさんは病気により表情は乏しく表情ははつきり読み取れなかったが、奥様

は非常に喜んでくれて、私も訪問看護をやっている本当に良かった！と思った瞬間であった。

Tさんの在宅での看護目標は、呼吸状態を悪化させないことと、奥様の介護負担を減らすことである。週4回訪問し、呼吸補助や端座位などの呼吸ケアを行った。痰が多くなると吸引の回数も増えて、奥様の介護負担が増えてしまうからだ。次に重要なのは、排便の介助で、訪問時にできるだけ排便を促した。

Tさんのケアは、訪問診療の医師やケアマネージャー、訪問入浴や福祉用具のスタッフと連携を取りながら行った。その間、肺炎を起こすこともなく、体調もおおむね安定して10年以上在宅で過ごすことができた。のちに待望のお孫さんも生まれて、Tさんを囲んで、家族の写真も撮ることができた。

病気を抱えた方が家で過ごすためには病状が安定していることが重要で、その役割を担うのが訪問看護だと考えている。